発掘調査の概要

甘樫丘東麓遺跡の調査（飛鳥藤原第171次）

甘樫丘東麓遺跡の発掘調査は小規模なものも含めると今回で９回目になります。これまでの調査で、７世紀から８世紀にかけて、谷の埋め立てなど大規模な造成をともなう活発な土地利用がおこなわれていたことが明らかになっています。

また、『日本書紀』によると皇極天皇３年（644）、甘樫丘に蘇我蝦夷・入鹿親子の邸宅が建てられたことが記されており、蘇我氏の邸宅と当遺跡との関連についても、関心を集めています。

今回の調査では、丘陵裾部の土地利用状況の解明と2009年度の調査で一部見つかっていた谷部の炭・焼土層の性格解明を目的としています。調査区を谷の出口付近に設定し、2011年９月22日から調査を始めました。

丘陵裾部の調査では、柱穴数基を検出しましたが、大部分は近世の段畑造成時に削平を受けており、古代の遺構は柱穴以外に確認できませんでした。谷部の調査では、谷の斜面に切り土や埋め立てにより平坦面を作っており、そこでは火を受けて地面が赤色化・硬化した痕跡が見つかりました。これらの被熱面の上には焼土・炭・土器片を含む炭混じり層が堆積し、その後、一気に谷を埋め立てている状況が明らかになりました。

出土した遺物から見て、この谷を埋め立てたのは７世紀中ごろのことであり、谷の平坦面で火を使用したのはこの直前のことであったとみられます。

この平坦面および、赤色化・硬化した遺構の性格解明に向けて、都城発掘調査部一丸となって慎重な検討を進めています。（都城発掘調査部　小田 裕樹）

赤色化した被熱面の検出状況（南東から）